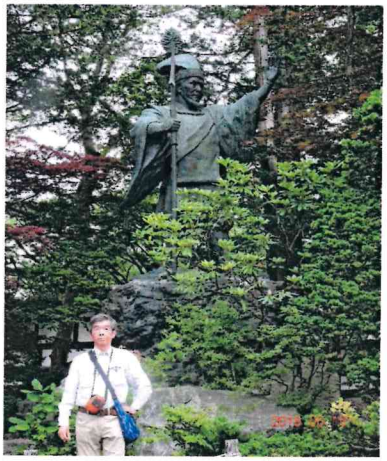
島義勇銅像建立２周年記念講演会　　令和２年11月23日（月・祝）

13時～１６時　　於：佐賀市メートプラザ　　（無料）

「北海道開拓に見る島義勇の足跡と開拓者精神」

講師：望田武司（元NHK社会部記者、札幌観光ボランティアガイド）

昭和46年建立　札幌市役所ロビー



昭和49年建立　北海道神宮

札幌
・白老町
ウポポイ（国立アイヌ民族博物館・民族共生象徴空間）
2020年7月オープン

北海道の面積は83,424㎢で日本のほぼ2割。
九州(36,782㎢) ＋中国地方(31,900㎢)＋
四国3県(14,655㎢徳島除く)＝83,337㎢で
ほぼ北海道になります。

佐賀

平成30年建立　佐賀城公園

主催：北海道大学同窓会　佐賀県支部　　後援：佐賀新聞社

問合せ：事務局　大宅（０９０－７４６１－４４６２）
メール：ooya@sinwa-consultant.jp（株）親和コンサルタント内

ご挨拶

今年11月14日（土）に予定しておりましたエスプラッツでの「第28回佐賀県青春寮歌祭」はコロナウイルス感染対策の中で特に飛沫感染対策が講じにくいので、やむなく中止としております。

さて、今年3月22日に急逝しました北大同窓会佐賀県支部長であった故久保英継さんと、年が明けてから入退院を繰り返されておられるときに、北海道開拓の父と呼ばれる島義勇の銅像が建立されて２年を迎えることから、今年の「第２８回佐賀県青春寮歌祭」と前後して、「島義勇と北海道、札幌の街づくり」と題した講演会を北大同窓会主催で開催しようと話し合っておりました。これは、寮歌祭の目的の一つに「各校同窓会が本学の持つ歴史、教育、文化、スポーツなどを佐賀県へ引っ張ってきて」と呼び掛けていることにあります。

そこで、昨年6月に私が札幌で島義勇とクラーク先生の関係を調べていた折に、札幌時計台の観光ガイドで、元NHK社会部記者の望田武司さん（77歳）より、佐賀のまちで島義勇の街づくりについて講演してもいいよとのお話を頂いておりました。望田さんは、元NHK社会部記者で、定年後、札幌に定住され、北海道、札幌、明治維新の歴史について広い知識と深い見識を持っておられ、歴史をいろいろな角度から見ておられます。

今回の講演では、開拓使主席判官・島義勇を中心に北海道の開拓、札幌の街づくりに携わった多くの人々についても語ってもらいます。北大の先輩たちは佐賀から札幌まで汽車と青函連絡船で2泊3日、72時間の旅だったと言ってます。今は福岡空港～新千歳空港まで２時間半の旅です。島義勇が開拓使主席判官として札幌の街づくりを始めてから１５２年経った今も、なお若者を惹きつける北海道の魅力と、開拓者の精神を改めて味わってほしいと思います。

令和２年１１月２３日

北大同窓会佐賀県支部　支部長代理　大宅公一郎

講演者　　望田武司（もちだたけし）氏

1943年生まれ、新潟県出身、1968年NHK入局（社会部記者、各ニュース番組デスク・編責担当）

2003年退職し札幌市在住、現在札幌市の観光ボランティアをしながら海外へも足を延ばし見聞を広めている。

著書：「敗軍の将、輝く（榎本武揚の生きざまの検証）」、「揺れ動くまな板の上の鯉」

北海道大学

秋田大学

東京農業大学

鳩首の男が銅像に（上）　（報文：全５章全３７貝より抜粋）
故郷佐賀に建った札幌の開祖

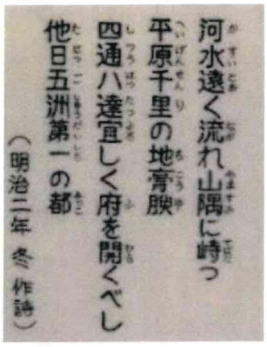
2018.12.22

望田武司（札幌市）　t21xmochida@feel.ocn.ne.jp

島判官が札幌に入ったのは明治２年旧暦の 11 月、（今の 12 月）この年は大雪で灌木も雪に埋もれるほどで、石狩原野は一面の大雪原と化した。

雪をかき分けて島判官を案内した人は、和人として初めて札幌に住み着いた吉田茂八と志村鉄一、それに札幌の隣村に早くから入植した早山清太郎の3人である。

振り返って雪一色の大地を見た島判官は次のような漢詩を詠んだ。



河水遠く流れて山隅に峙（そばた）つ　（川がとうとうと流れ、山並みが近くにそびえる）

平原千里の地 膏腴（こうゆ）　（見渡す限りの平野は肥沃であり）

四通八達宜しく府を開くべし　（交通は四方八方に通じ、都として最適だ）

他日 五洲第一の都　（いつの日か、日本一の都になるだろう）

島判官は漢詩が得意だったと見え、北海道滞在数か月で実に 40 首を詠んでいるが、この詩が一番有名な作で、市役所ロビーの像の台座にも刻み込まれている。五洲第一とは本州九州の日本一でなく、五輪つまり世界一の都だと読む人もいる。

童門冬二という歴史小説家がいる。童門冬二といえば新選組を思い出す。

歴史物のコメンテーターとして、ちょくちょくテレビに出ていたが、最近はめっきりお目にかかっていない。訃報記事も見てないし、最近はどうしているのかなと思っていたら、先月上京した際に本屋に寄ったところ「90 歳を生きること」という本が店頭に山積みされていた。

現在 91 歳。

彼はもともと東京都庁の役人で本名は太田久行、外局の事務局長時代、いつも局長室で新選組を 調べていた。

彼のポストは副知事しか残っていないと言われたとき、役人を辞め作家生活に入るが、そのころ札幌市を訪れたことがあった。

当時の東京都庁は今の新宿ではなくてまだ丸の内にあって、その正面入口には江戸城を築いた太田道灌の像があるのを意識したのか、「国家反乱人の像をなぜ市役所内の一番目立つ１階ロビーに建てたのか」と当時の札幌市長に尋ねた。

時の札幌市長曰く

「歴史上の人物にはそれぞれ生まれてから死ぬまでの過程があり、とくに明治維新は大きな変革期だった。ある時期だけを捉えてその人物を全面的に否定するのは間違いだ。島義勇にも年齢に応じた功績があり、とくに若い頃は札幌市開拓の大恩人だった。国家反乱人になったのは後半のことで、札幌市には関わりがない」

この話を聞いた童門冬二は「目からうろこが落ちた。その歴史観は正しい。以降、私は歴史上の人物をそのように見るようにしている」と書いている。

歴史小説家が役人ＯＢの市長から、歴史を見る目、人を見る目を教わり、謙虚に受け入れている。

私は以来童門冬二のファンとなって、テレビに登場するときは欠かさず視聴していた。

札幌市長から大恩人だといわれた島義勇判官は、札幌本府づくりに乗り出すが、真冬の厳しい寒さの中、食糧も乏しく悪戦苦闘の一日一日となった。

この時である。島判官は突然更迭されるのである。

２代目開拓使長官となった公家の東久世通禧（みちとみ、写真左）は「島は金を使いすぎる」と言って、島を更迭するか、開拓使予算を増やすか、どちらかを太政官（今の内閣官房）に迫った。

・・・・・続く

北大同窓会　佐賀県支部では、下記のロマンを追っています！

「第２６回佐賀県青春寮歌祭」平成30年11月24日プログラムより

佐賀新聞　2018年(平成30年)2月12日(月曜日)

クラーク先生の「大志」と島義勇

佐賀市　大宅　公一郎　65

札幌農学校のクラーク先生は、別れの言葉として生徒たちに「ボーイズ・ビー・アンビシャス」に続けて「ライク・ディス・オールドマン」と告げられています。つなげれば「青年よ大志を抱け、この老年の私のように」となりますが、違和感を感じていました。私は「ライク・ディス・オールドマン」とは明治維新に北海道開拓使主席判官として北海道の開拓、札幌の街づくりに尽力した島義勇を指すのではないかと思います。

明治9年、クラーク先生は札幌農学校に赴任し、つち音が響く中、北海道の開拓、札幌の街づくりを見て回られました。当然、これらの大いなる開拓構想の線引きが島義勇によってなされたことも知られたと思います。札幌市役所の島義勇の銅像に記された島の漢詩には「平原千里、地は肥え、道は四方八方へ通じ、いつの日か世界一の都となる」とあります。江戸末期に鍋島藩の家臣として蝦夷地の探検を行ってきた島の記録「入北記」には画才を駆使して描いた、地図や風景画、見取り図など詳しく記されています。

これらを基に島義勇が描いた壮大な北海道開拓構想をクラーク先生は見ておられたからこそ、別れ際に図面を指さし「ライク・ディス・オールドマン」すなわち「10年前に、壮大な開拓構想を描いた若たちの先人、島義勇のように大志を抱け」とおっしゃったのではと思います。

毎年11月に開催している県青春寮歌祭には、全国各地の大学の県内同窓生が集い、寮歌・校歌・応援歌を歌うだけでなく、母校の歴史、教育、人材、技術、スポーツなどを佐賀県につないでいます。北大同窓会ではクラーク先生の「ボーイズ・ビー・アンビシャス」が実は島義勇を手本にしていることを突き止め、クラーク先生の大志の系譜を佐賀へつなごうと思います。

今年は明治維新150年を契機に島義勇の銅像が建立されます。史実を突き止め佐賀の乱で無念を遂げた島義勇への手向けとし、さらに北の大地へ大志を羽ばたこうとする若人へのはなむけにしたいと思います。

「開拓の群像」平成29年発行より

島義勇像＝札幌市役所ロビー

クラーク先生と その弟子たち

大島正健 著
大島正満
大島智夫 補訂

教文館

しかし今やその原型は「Boys, be ambitious like this old man」であったことはほぼ疑いない。

一九七二年の学士会月報七一五号に高倉新一郎氏が「クラークの教訓」を寄稿され、その中に明治二十七年の札幌農学校学芸会の雑誌『蕙林』に安東幾三郎がクラークの別れの言葉をこのように記しているのを最古の文献として紹介された。

秋月俊幸氏の「校友会誌から見た札幌農学校の校風論」（北大百年史通説所載）には更に詳細にこの言葉は明治二十五年九月、札幌農学校予科主任であった大島正健が「我が先師ウィリアム・クラーク氏」と題し「慷慨熱心なる語調で」講演したのに、当時予科生であった安東が啓発され、さらに札幌にいた一期生数人の談話を得てまとめて校友会誌に六回にわたり「ウィリアム・エス・クラーク」を連載した中で、クラークの別離の言葉を "Boys, be ambitious like this old man" としてある。勿論これは大島正健の述べたものの再録であるが、当時札幌にいた一期生の伊藤一隆、佐藤昌介、内田瀞もこれに異議を称えなかったところを見ると事実であろうと思われる。

より直接的な証拠は後年大島正健自身が、『ジャパン・クリスチャン・インテリジェンサー』に掲載した英文のクラーク先生の憶い出の中にクラーク先生が別離に際し馬上で発せられた言葉を "Boys be ambitious like this old man" といわれたと書いていることである（二七八頁）。

当時五十三歳のクラークは米国流にいえばすでに old man でありながら、札幌の八ケ月はまさに覇気満々、永遠の青年の如くに理想を抱いて活躍してみせたのであるから、此の老人のようには二重の重い意味があろう。

（株）教文館 1993年発行
より引用

クラーク先生の"Boys be ambitious! Like this old man."　の　Like this old man.
が島義勇を指しているのであれば、佐賀の島義勇の銅像のそばにクラーク先生の３番目
の銅像を建てたいと考えています。今までの調査では可能性が低いですが、あきらめません